



平安時代のつぼ・かめづくり

⑦彦右工門橋窯跡 (大衡村大衡駒場)



大衡村の中央部に位置する奈良・平安時代の遺跡です。これまで大衡村教育委員会や宮城県教育委員会による発掘調査で、窯跡や土器づくりに関わる建物などが多くみつ

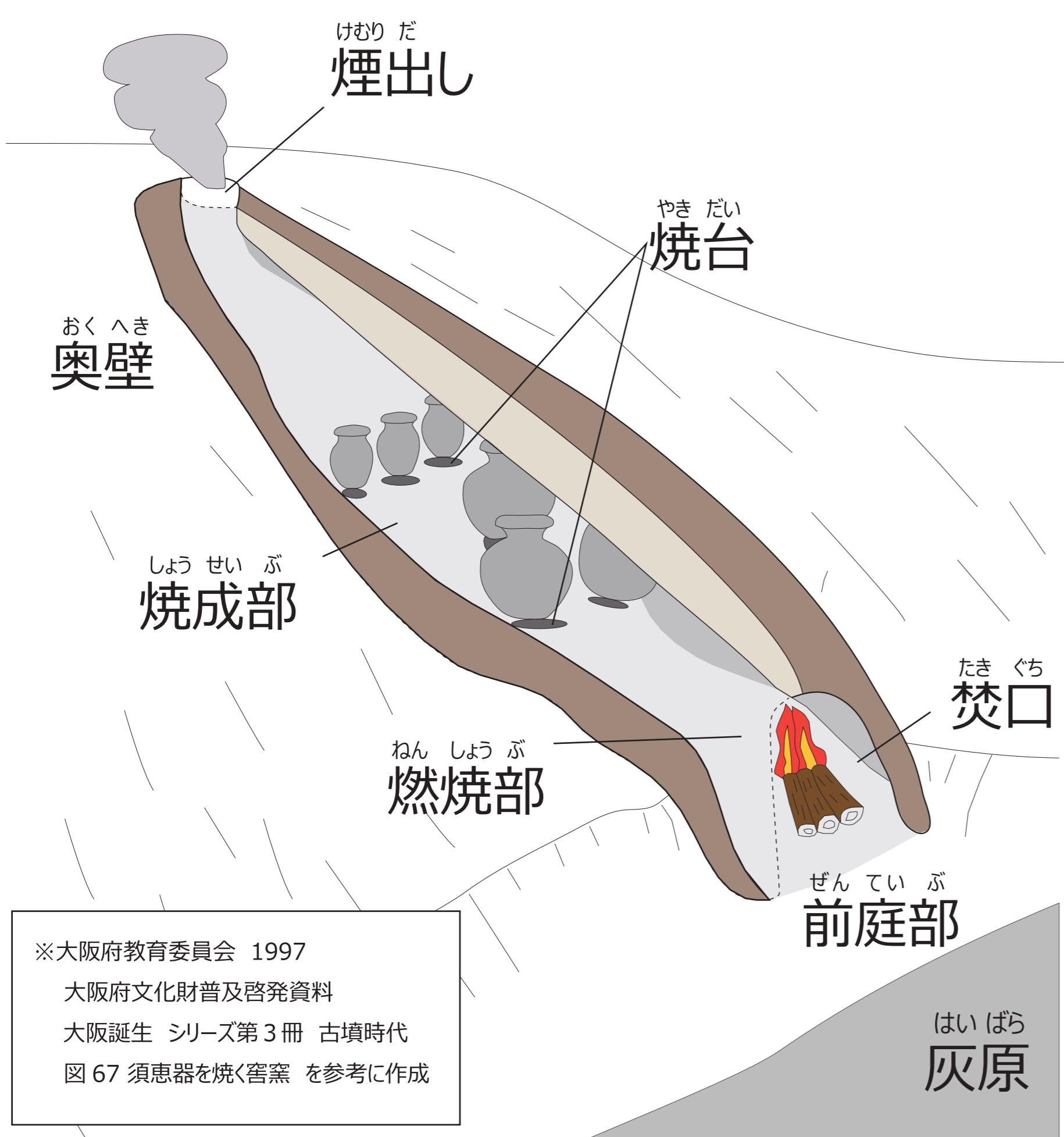
かっていることから、土器や瓦を生産している集落であったことが分かっています。

今回の調査では、遺跡西端の丘の上から新たに須恵器を焼く窯跡がみつかりました。9世紀終わりころの窯跡とみられ、壺や甕が焼かれていたことが分かりました。当時の人々の生活にかかわる製品がどのように作られていたかが分かる貴重な調査成果です。



▲ 窯跡の調査状況

斜面の下で焚いた火の熱が効率的に上っていくよう造られた^{あな がま}窖窯と呼ばれる形です。斜面の上方と天井部分は失われています。焚口^{たきぐち}には燃料の黒い炭が残り、土器を並べていた焼成部^{しやうせいぶ}は高温により土の壁や床までもが固く灰色に焼けていました。



※大阪府教育委員会 1997
大阪府文化財普及啓発資料
大阪誕生 シリーズ第3冊 古墳時代
図 67 須恵器を焼く窖窯 を参考に作成

▲ 須恵器窯の復元想定図



▲ 須恵器が出土した状況

この窯では、大きな壺や甕（液体や食物を貯めておく容器）を専門に焼いていたようで、周辺の窯跡にはない特徴です。上手く焼けた製品は取り出されており、壊れてしまったものなどが残されていました。

協力：大衡村教育委員会